

赤い実

小川未明

青空文庫

だんだん寒さむくなるので、義雄よしおさんのお母かあさんは精せいを出だして、お仕しごと事をなさっていました。
「きょうのうちに、綿わたをいれてしまいたいものだ。」と、ひとりごとをしながら、針はりを持つ手てを動かうごかしていられました。
秋あきも深ふかくなって、日脚ひあしは短みじくなりました。かれこれするうちに、はや、晩方ばんがたとなりましたので、あちらで、豆腐屋とうふやのらっぱの音ねがきこえると、お母かあさんの心こころは、ますますせいたのでありました。

ちくちくと、縫ぬっていられますうちに、糸いとが短みじくなって糸いとの先さきが、針孔みぞからぬけてしまったのです。お母かあさんは、新あたしい糸いとの先さきを指ゆびで細ほそくして針孔はりの孔あなにとおそうとなさいましたけれど、うまいぐあいに、糸いとは孔あなにとおらなかつたのです。

お母かあさんは、気きをおもになりました。そして、明あかるい方ほうを向むいて、針はりの小ちいさな孔あなをすかすようにして、糸いとの先さきをいれようとしたが、やはりうまくいきませんでした。

「義雄よしおさん。」と、お母かあさんはたまりかねて、隣となりのへやで、勉べんきよう強きやうをしていた義雄よしおさんをお呼よびになりました。

「なんですか、お母かあさん。」と、義雄よしおさんは、すぐにやってきました。

「お母^{かあ}さんは、目^めがわるくなつて、とおらないから、ちよつと糸^{いと}を針孔^{みぞ}にとおしておくれ。」と、おつしやいました。

これをきくと、義雄^{よしお}さんは急に胸^{きゆうむね}がふさがつて、悲^{かな}しくなりました。

「お母^{かあ}さんは、まだおばあさんじやないんでしょう。」と、義雄^{よしお}さんはききました。

「いいえ、もうおばあさんなんですよ。」

こうおつしやつたお母^{かあ}さんの言葉^{ことば}に、やさしい義雄^{よしお}さんは、目^めの中に、熱^{あつ}い涙^{なみだ}がわいてきました。糸^{いと}をとおしてあげて、ふと、庭^{にわ}さきを見ると赤^{あか}いものが、目^めにとまったのです。

「あの、赤^{あか}いのはなんだろうな。お母^{かあ}さん、あの赤^{あか}いのはなんでしょうね。」

「どれですか。」

「ぎくろの木^きの、あの枝^{えだ}さきについている……。」「

すでに、黄色^{きいろ}くなつた葉^はが落^おちてしまつて、ぎくろの木^きは枝^{えだ}ばかりになっていました。

その一本^{ほん}の枝^{えだ}のさきに、小^{ちい}さい真^まつ赤^{あか}なものが、ついていたので。そして、それはなんであるか、お母^{かあ}さんにもわかりませんでした。

義雄^{よしお}さんは、庭^{にわ}に下^おりて、すぐにぎくろの木^きに登^{のぼ}りはじめました。

「おちるといけませんよ。」と、お母^{かあ}さんは、注^{ちゆう}意^いをなさいました。

「だいじょうぶです。」と、義雄^{よしお}さんは、もう木^きの中^{なか}ほどまで登^{のぼ}ってその枝^{えだ}に、足^{あし}をかけました。

近^{ちか}づいてみると、ちょうどルビーのように、美^{うつく}しくすきとおる、なにかの小^{ちい}さい実^みが、ざくろのとげにつきさされていたのでした。

「どうして、こんなところに赤^{あか}い実^みがつきさされているのだろう。」

義雄^{よしお}さんは、赤^{あか}い実^みをとげからぬき取^とって、木^きから下^おりると、お母^{かあ}さんのところへ持^もてまいりました。

すると、お母^{かあ}さんは、

「うぐいすか、なにかそんなような鳥^{とり}が、どこからか、くわえてきてさしていったのです。」とおっしゃいました。

「どうして、あんなところにさしておいたんでしょうね。」

「あとから、こつちへとんでくるお友^{とも}だちに知^しらせる目^め印^{じるし}にしたのかもしれないね。それでなければ、あまり赤^{あか}くてきれいな実^みだから、食^たべるのが惜^おしくてしまっておいたのかもしれない。そして、そのうちに忘^{わす}れてしまつて、どこかへ飛^とんでいつてしまったのでしょう。」と、お母^{かあ}さんはおっしゃいました。義雄^{よしお}さんは、なんだかそのうぐいすがな

つかしい気がしました。

「お母さん、きつと、惜しくてたべなかつたんですよ。」

「ああ、そうかもしれないですね。」

美しい、赤い実を掌の上にのせて、ながめていた義雄さんは、なんの実だろうかと思ひました。

「お母さん、木の実でしょうか、草の実でしょうか？」と、ききました。

「やぶの中に生えている、なにかの木の実のようですね。」

「これを土にうずめておくと、芽が出るでしょうか。」と、義雄さんは、たずねました。

「ええ、出ますとも、みんな草や、木の実は下に落ちてそこだけに、芽を出すものではありません。こうして、鳥にたべられて、その鳥が、遠方に飛んでいって、ふんをすれば、

種子が、その中にはいついて、芽を出すこともあるのです。そして、その芽が大きく伸びて、一本の木となった時分には、その木の親木は、もう、枯れていることもあります。

またじようぶでいることもあります。そんなことが、たび重なるにつれて、その木の子や、孫が地面上に殖えていつて繁栄するのです。」と、お母さんは、おっしゃいました。

「考えると、不思議なもんですね。」

「それだから、美しい実のなるのも、木には、深い意味があるので、自分の種類を保存することになるのです。」

「人間は、どうなんですか。」

「どう、おまえは考えるの。お父さんや、お母さんは、だんだん年をとって、働くことができなくなります。その時分には、おまえたちは大きくなって世の中のためにつくし、また、家のために力とならなければならない。そして、私たちの力でできなかったことをもやりとげなければならないのです。」とおっしゃいました。

義雄さんは、お母さんのお話をきくと、いつそう、赤い実がなつかしくなりました。その赤い実を、またぎくろの木にさしておこうかとも思ったが、それよりは、お庭の日当たりのいいやわらかな土にうずめてやったほうがいいと思って、そうしました。

義雄さんには、将来の楽しみが一つできました。来年の芽の出る春が待たれたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「赤《あか》い実《み》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い実

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>